介護福祉士の講師育成に関する研究について
～　講師勉強会１年目の活動から見えてきたもの　～

伊木康人[1)]
1）済生会山口地域ケアセンター

Ⅰ．研究目的

介護福祉士は、介護現場においてリーダーとしての役割を担い、専門性を発揮することが求められている。日本介護福祉士会では、介護福祉士の専門性について「利用者の生活をより良い方向へ変化させるために、根拠に基づいた介護の実践と共に、環境を整備することができること」[1)]と定義しており、さらに「介護過程の展開による根拠に基づいた介護実践」・「指導・育成」・「環境の整備、多職種連携」という３項目を相互に関連させて循環させるところに介護福祉士の専門性があると述べている。

本研究では、介護福祉士の専門性の 3 つの項目の中から「指導・育成」に注目する。介護の現場では、経験を積んでいくと職場内での研修の企画や、実際に講師を行うなど人材育成に関わることが多くなってくる。また、山口県介護福祉士会の活動では、自分の職場から離れて様々な場所で講師を行っている者もいる。介護福祉士が講師を行うことは、同じ介護職員の人材育成に貢献でき、さらには地域の講座などで講師を行うのであれば地域の人々にも貢献することができる。

しかし、講師の活動は介護現場とは違い、講義の時間の管理、教育方法の理解、研修デザインなど、また違ったスキルが求められることになる。2023 年、山口県において初めて「リーダー研修（前期）講師養成特別講座」が開催された。多くの学びを獲た後、研修を受講した有志数人（以下、世話人）が自主的に集まり、講師のスキルアップや講師を行う人材育成を目的に「介護福祉士講師勉強会」を企画することになった。勉強会の内容は、リーダー研修（前期）講師養成特別講座を参考にしたシラバス・授業案の作成と模擬授業を行うプログラムである。近年、ＡＩなどの技術がめざましく進歩を遂げる中で、介護福祉士自身がシラバスや授業案を作成することは、自らが調べ、考え、講義の目的や手法を組み立てることで、より実践的なものになり、さらにその後に評価（振り返り）を行うことによって設計する能力の向上や、講義のやり方を養うことができるのではないかと考える。本研究は、「介護福祉士講師勉強会」の実践において、その成果と今後の課題について報告する。

Ⅱ．研究方法

１．対象

2024 年 4 月において介護福祉士としての経験が 3 年以上ある者で、「介護福祉士講師勉強会」の世話人及びに参加した者の 15 名（世話人 7 名、参加者 8 名、年齢 46.7±6.6 歳）を対象とした（回収率は第 1 回目 100%、第 3 回目 60%、第 4 回目 73%、第 5 回目 27%、第 6 回目 60%）。

２．調査方法

① A 施設において「介護福祉士講師勉強会」を 1 年間偶数月（第１土曜日）にて全 6 回を開催した。プログラムの内容は以下の通りである。

4 月	第 1 回	勉強会の目的・シラバスを学ぼう
6 月	第 2 回	シラバス作成（グループワーク）
8 月	第 3 回	講義演習（模擬授業）
10 月	第 4 回	自職場で活用するためのシラバス作成・演習
12 月	第 5 回	自職場で活用するためのシラバス作成・演習
2 月	第 6 回	自職場で活用するためのシラバス作成・演習

② 4 月～6 月を前期とし、第 1 回目はシラバス作成の講義を行った。その後、「介護の特定技能評価試験　学習テキスト」を使用してグループにてシラバスの作成と４０分間の模擬授業を行った。10 月～2 月は後期とし、参加者一人一人がテーマを自由に決めてシラバスの作成と 30 分間模擬授業を行った。なお、前期・後期とも模擬授業終了後に模擬授業に対する評価表に記載して、発表したグループ・発表者に渡して振り返りの時間を作った。

③ 前期の第 1 回と 3 回目と、後期の第 4 回目、第 5 回目、第 6 回目に世話人及び参加者には研修終了後に自記式質問紙を記入してもらった。

３．調査実施期間

2024 年 4 月 6 日～2025 年 2 月 1 日

４．主な調査内容

調査票は、第１回目は基本属性について年齢、性別、介護等の業務従事経験年数等の７項目を設定し、

シラバスと授業案の理解度については「シラバスについては理解できましたか？」、「授業案について理解できましたか？」、「今後の講師活動に活用できそうですか？」の３項目を５件法にて設定した。また、研修への意見については自由記述を設定した。第 2 回目以降は「シラバスについては理解できましたか？」、「授業案について理解できましたか？」、「今後の講師活動に活用できそうですか？」の３項目を５件法で設定し、研修の意見を自由記述で設定した。

５．調査に際しての倫理的留意

調査実施に際しては、調査対象者への調査目的の説明を行い協力の同意を得た。調査データの取り扱いに際しては、対象者のプライバシー保護に留意し、調査された情報のデータ管理についてはプライバシーの保護を厳重に行なった。

６．分析方法

分析方法は単純集計及びクロス集計。質問項目の「シラバスについては理解できましたか？」、「授業案について理解できましたか？」、「今後の講師活動に活用できそうですか？」は、５件法から平均値を算出し比較した。

Ⅲ．結果

1, 基本属性

世話人及び参加者の性別は男性 8 名、女性 7 名であり、業務従事経験年数は平均 19.9 年（±6，6）であった。

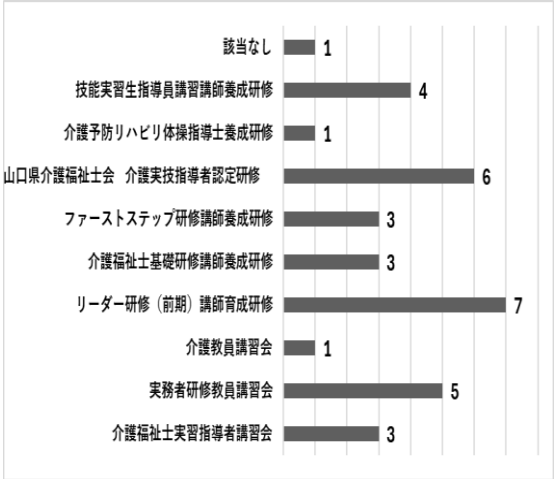

図 1. 各種研修の講師要件に関する研修・講習等の修了について。複数回答(n＝15 人)

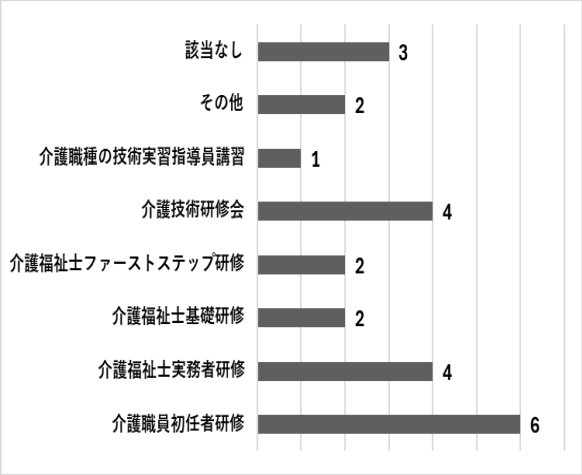

図 2. 各種研修・講習等の講師としての経験について。（n＝15 人）

2, シラバスと授業案の理解度について

①前期(4 月～6 月)の結果について

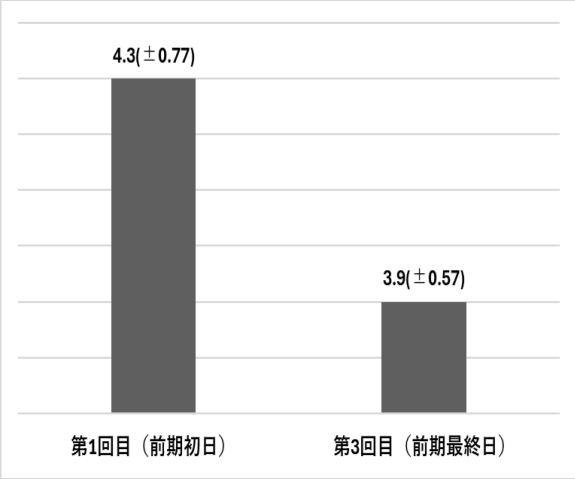

図 3. シラバスについて理解できましたか？(第1回目n＝15 人、第 3 回目n＝9 人)

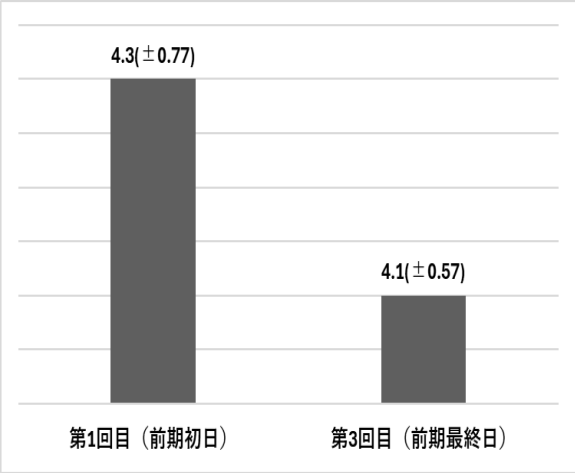

図 4. 授業案について理解できましたか？(第1回目n＝15 人、第 3 回目n＝9 人)

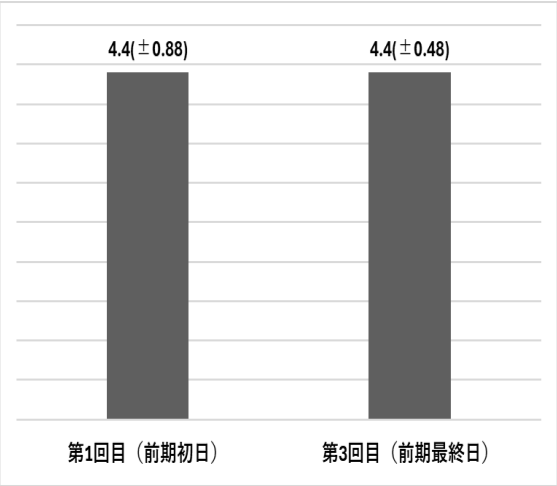

図 5. 今後の講師活動に活用できそうですか？（第1回目n＝15 人、第 3 回目n＝9 人）

②後期（8 月～12 月）の結果について

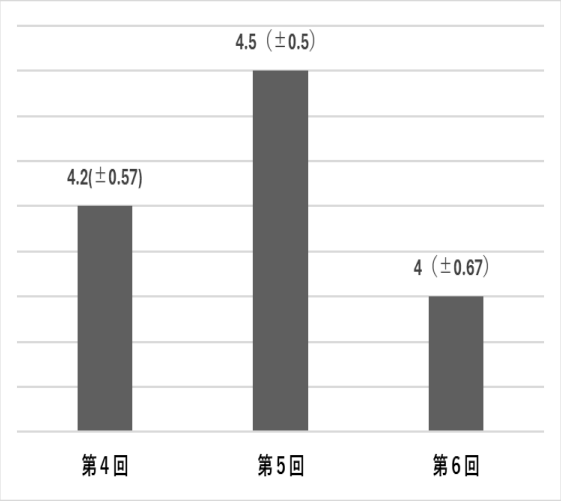

図 6. シラバスについて理解できましたか？（第 4 回目n＝11 人、第 5 回目n＝4 人、第 6 回目n＝9 人）

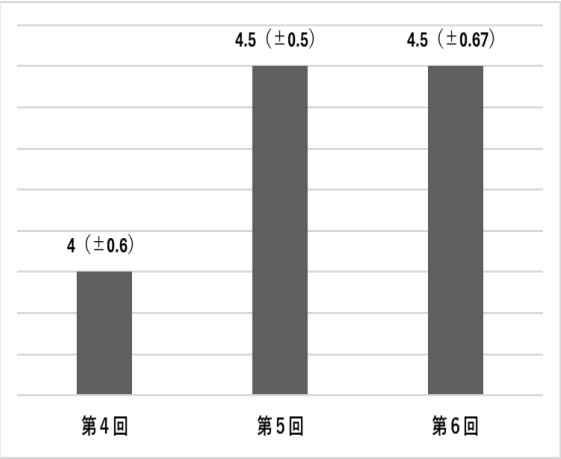

図 7. 授業案について理解できましたか？（第 4 回目n＝11 人、第 5 回目n＝4 人、第 6 回目n＝9 人）

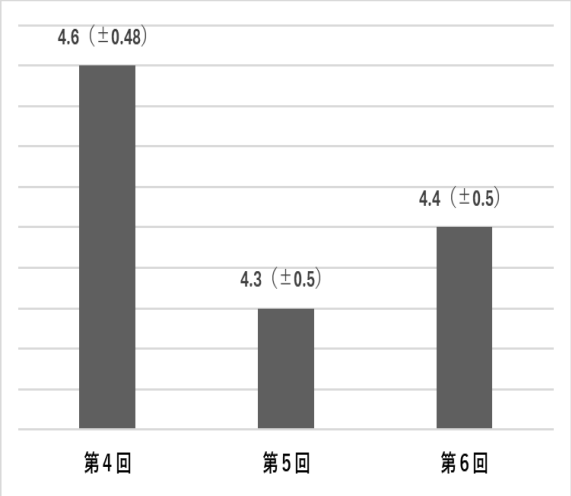

図 8. 今後の講師活動に活用できそうですか？（第 4 回目n＝11 人、第 5 回目n＝4 人、第 6 回目n＝9 人）

Ⅳ. 考察

1. 基本属性について

「介護福祉士講師勉強会」は世話人も初めての試みであり、今回の研究では世話人も調査対象者として参加者とともに自記式質問紙調査に記入してもらった。世話人及び参加者の業務従事経験年数を見ると 19.9 年と中堅からベテランの領域の方がほとんどであった。また、研修の講師要件に関する研修・講習等も幅広く修了されている方が多く、すでに講師の経験を持っている方が参加されていた（図 1、図 2）。一方で、自由記述の中において「今まで計画なしで行っていた」という意見もあり、講師経験がある方でもシラバス及び授業案の作成に初めてという方もみられた。

2. 前期（4 月～8 月）の結果について

前期は「介護の特定技能評価試験　学習テキスト」を使用して、グループにてシラバスの作成と４０分間の模擬授業を行った。シラバスと授業案の理解度において、それぞれの調査項目の平均値を比べてみると「シラバスについて理解できましたか？」の項目は、第 1 回目は 4.3（±0.77）であり、第 3 回目は 3.9（±0.57）と、0.4 ほど数値が下がっていた。また、同様に「授業案について理解できましたか？」の項目において第 1 回目は 4.3（±0.77）であり、第3回目は4.1（±0.57）と、その差は 0.2 と下がっていた（図 3、図 4）。

私たちは、当初勉強会が進んでいく中で理解度は増加していくことを予想していた。しかし、結果は逆であることが分かった。理解度が低下した要因として、講師育成勉強会1日目はシラバスの講義を受けるが、世話人及

び参加者は、最初は理解して進めていると思っていても実際に模擬授業を行ってみると困難さを感じたのではないであろうか。授業を行う上で、伝えたいことや時間通りに行う困難さに直面した可能性があった。ただし、今回はアンケート数が少なく統計でその差を見ることはできなかった。また、困難さがあったということを示す他の根拠もまだ確認できていないため、次回さらなる研究の継続が必要であると考える。

2. 後期(10 月～2 月)の結果について

後期（10 月～２月）は、参加者一人一人がテーマを自由に決めてシラバスの作成と 30 分間模擬授業を行った。シラバス及び授業案の理解度において、それぞれの調査項目の平均値を算出し比べてみると、まず「授業案について理解できましたか？」の項目においては、第４回目は 4(±0.6)であり、第５回目は 4.5(±0.5)、第 6 回目は 4.5(±0.67)と理解度は上昇していた(図 7)。前期でシラバス及び模擬授業案の作成と、その実践・振り返りを一通り体験し、その上でさらに同じプロセスを体験したことによって理解度の増加につながった。つまり、講師を行う為のトレーニング及びその振り返りを定期的に行うことで授業案の理解につながったと考える。また、自由記述においては「人の授業を、話し方を見ることができてとても参考になる。」という内容もあり、様々なバリエーションの模擬授業を見ることで自分自身にその方法を取り入れることにもつながり、見ている参加者も理解度が進んだと考える。

しかし、その一方では、「シラバスについて理解できましたか？」の項目は、第４回目は 4.2(±0.57)、第５回目は 4.5(±0.5)、第 6 回目は 4(±0.67)であった。同様に「今後の講師活動に活用できそうですか？」の項目は、第 4 回目は 4.6(±0.48)、第 5 回目は 4.3(±0.5)、第 6 回目は 4.4(±0.5)と平均値にバラツキがあった(図 6、図 8)。前期は同じ題材をグループで進めるため縦断的に評価することができたが、後期は参加者一人一人全く違う内容を講義するため縦断的な評価は難しく平均値にバラツキが生まれたのだと考える。今後、後期については評価方法を検討する必要があった。

3. まとめ

前期・後期の結果から、介護福祉士が講師を行う上で理論的な知識を習得することは重要であるが、同時に実践的なトレーニングを定期的に行うことと、その振り返りを行うことが重要であることが今回の試みで示唆された。もちろん、アンケート数が少ないことや評価方法に検討の必要があるなどの課題があるため、本研究の結果は一つの可能性を見出したにすぎないが、今回明らかになったことが実際にみられているのか、引き続き調査を行う必要があった。また、今回は授業の評価は行ったものの、作成したシラバス・授業案自体が適切であったのかを評価することまではできなかった。次回は、授業の評価とともにシラバス・授業案自体の評価も行っていく必要があった。

Ⅴ. 結論

前期において「介護の特定技能評価試験　学習テキスト」を使用して、グループにてシラバスの作成と４０分間の模擬授業を行った結果、「シラバスについて理解できましたか？」と「授業案について理解できましたか？」の項目は、講師勉強会の 1 回目より 3 回目の方が理解度は低下していた。この結果は、最初はシラバスや模擬授業について理解して進めていると思っていても、実際に行ってみると実践の困難さがみられたからではないかと考える。また、後期では「授業案について理解できましたか？」の項目については理解度が増加した。前期で模擬授業案の作成から実践を一通り体験し、さらに後期において自分一人で模擬授業を実践・振り返りを行ったことから理解度が増加したと考える。

以上の事から、アンケート数が少ないことや評価方法に検討が必要であるなどの研究の限界はあるが、１，介護福祉士が講師を行う上で理論的な知識を習得すること。２，実践的なトレーニングが必要であること。３，実践への振り返りを行うことが、介護福祉士が講師を行う上で重要であることが示唆された。

謝辞

本研究にあたり快く御協力くださった参加者とともに会場を提供していただいた A 施設に深く感謝いたします。

引用・参考文献

1) 日本介護福祉士会（2025）
（https://www.jaccw.or.jp/about/fukushishi/senmon）
2) 山本まき恵　他（2017）「中堅以上の介護福祉士の講師体験におけるやりがいの構造」『岡山県立大学保健福祉学部紀要』 第 24 巻１号　p117～p124